



『すてきな一歩』

作詞 長井 理佳

作曲 長谷部 匡俊

どんな人とも 仲良くなれる
そんな自分に なれたらいいな
もしも誰かが 一人でいたら
話してみよう 心をのせて
見えない橋を すいっとかけて
すてきな一歩を ふみだそう

どんな人にも やさしくなんて
出来ないような 気もするけれど
ほんの小さな 言葉でいいよ
伝えてみよう 心をのせて
笑顔の橋を ふわっとかけて
すてきな一歩を ふみだそう



百聞は一見に如かず

～体験を通して学ぶことの大切さ～

校長 髭白 梨香

ある日の休み時間、校庭の水たまりのそばで、数人の子どもたちがしゃがみ込んでいました。前日の雨が残した水たまりは、青空を映して小さな鏡のように光っています。その前に立つと、自分の影が水面にくっきりと映ることに気付いた子が、「わたしの影が長くなった。」「こっちは短いよ。」子どもたちは、影の長さが場所によって違うことに興味をもち、太陽の位置と影の形を比べ始めました。立つ位置を少しずつ変え、影の変化を確かめています。すると、別の子がふと顔を上げて、「じゃあ、走ったら影も走るのかな。」と、次の瞬間、水たまりの前を勢いよく走り抜けていく子どもたち。影が自分を追いかけてくる様子に、周りの子どもたちはとても楽しそうでした。走るたびに影が揺れるのが面白くて、何度も何度も走って確かめていました。そのとき、子どもたちはふと学習で学んだことを思い出し、「影って、太陽が出ているとできるんだよね。」「太陽が動くときも動くんだよ。」生活科や理科で学んだことを、自分たちの体験と結び付けながら確かめるように話をする姿が見られました。教室での学びが、校庭での遊びの中で「生きた学び」としてつながっていく瞬間でした。

また、別の日の図工の時間。2年生の教室では、粘土をにぎって形をつくる活動をしていました。ある子が丸めた粘土を見て、「これ、だんごみたい。」とつぶやくと、周りの子どもたちも自分の粘土を見比べ始めました。「わたしのはパンみたい。」「こっちは石に似てるよ。」子どもたちは、日常生活の中で見たものと結び付けながら形を捉え始めました。「じゃあ、どうしてそう見えるのかな。」と問いかけると、子どもたちは、「丸いから。」「つるつるしているから。」「色が似ているから。」と、形や質感、色などの特徴に目を向けて考えを深めている様子に、見ていて嬉しくなりました。

子どもたちは、実際に体験したことを、これまでの生活経験や学習内容と結び付けて考えたり、比べたり、例えたり、推測したりしながら、より深い思考へと進んでいきます。まさに「百聞は一見に如かず」です。体験を通して生まれる小さな発見が、学びを深める大切な種になっていきます。子どもたちが「見て、気づき、考え、問いを深める」、その一つ一つの瞬間を、これからも丁寧に育んでいきます。